

児童用所属感尺度の構成（1）

吉田真知子、岡田 弘

Developing a measure of children's sense of belonging (1)

Machiko YOSHIDA* and Hiroshi OKADA*

We have conducted a research to develop scales on sense of belonging that can possibly measure the situations of classrooms at upper grades of an elementary school.

Questions over 25 items of scales on sense of belonging were asked to 626 students, and we have extracted 17 items that stands on 3 factors.

Those 3 factors are the level of norm, the level of mutual aids and the level of psychological supports. The reliability and validity of those scales would be examined by the following researches.

問 題

2007年の学校基本調査¹⁾によれば、学校現場のいじめによる自殺の発生、登校拒否児童・生徒の発生率等が減少していない。こうした学校現場の根底にあるものの一つが、日本人の人間関係の在り方が変わってきたことが挙げられている。個と個のつながりを促進する役割を担っているのは、学級である。しかし、学級内の子どもたちの状況を客観的に図る手だては少ない。吉津²⁾は高校生を対象に2因子からなる所属感尺度を作成しているが、小学校5・6年生を対象とした尺度は開発されていない。学級づくりを行う教師が学級のありようを客観的に知ることのできる尺度を開発することによって、学級づくりのアイテムを提供したい。本研究では、小学校5・6年生を対象にし、その後中学、小学校中学年の尺度を増やしていきたい。そこで本研究では、小学校5・6年の学級集団を客観的に理解できる尺度の開発を目指した。

目 的

小学校高学年の学級集団の状況を測定できる所属感尺度を開発する。本研究は「児童用所属感尺度の構成」の予備調査に当たる部分である。因子分析による因子の

抽出と因子の命名を目的とする。

方 法

ハイマン (Hyman, H.H. 1942)³⁾ は人が自分自身と関連づけることによって自己の判断や評価の形成と変容が影響を受ける集団を準拠集団といった。ケリー (Kelley, H.H. 1951)⁴⁾ は準拠集団の果たす機能を規範的機能と比較機能とした。重野 (2006)⁵⁾ は、こうした機能を持つ準拠集団は、多くの場合、人が実際に所属している集団、すなわち所属集団が準拠集団であるとした。これらを踏まえ、本研究では先行研究の知見をもとに、小学校5・6年生を念頭に所属感の定義を次のようにした。

「学級集団内で相手と一緒に行動し、相手の面倒を見、相手を支持すること」。具体的には「相手の言動に反応し、協力、援助しようとする事」である。

1. 尺度項目の開発

項目内容の収集は、所属感の定義を示し、小学校高学年児童を念頭に、現職教員5人(女3男2)に自由記述をしてもらった。また、研究者ら自身による検討を加えた。選定した項目を25とし、逆転項目・ダミー項目は作らなかった。小学校高学年に短時間で実施できるよう

Keywords: 対人関係、共存在、Being with

*東京聖栄大学健康栄養学部

に、文言と意味の吟味を入念に行った。尺度は単極尺度とし、ポイントと数は4、文による表現とした。

2. 調査の実施

- (1) 実施期間 2007年(平成19年)9月中(各校の実施しやすい日)
- (2) 調査対象 小学校5年生・6年生
- (3) 調査実施校・人数・実施日 Table1に示すように行った。

Table 1 調査実施校・人数・実施日

	学年・人数		計	実施日
	5年	6年		
A校(山陰地方)	86名	78名	164名	9/25
B校(関西地区)	87名	66名	153名	9/10
C校(中部地区)	78名	82名	160名	9/10
D校(北陸地区)	74名		74名	9/4
E校(北陸地区)	35名	40名	75名	9/5
計	360名	266名	626名	

- (4) 調査方法 朝の会や帰りの会に担任が項目を読み上げながら、児童が回答。

3. 分析方法

主因子法による因子分析。因子負荷量0.40以上を持ち、同時に他の因子に0.35以上の負荷を持たないことを目標として項目の選定を行う。分析はSPSSバージョン16.0jを用いた。

Table 2 所属感因子分析結果

パターン行列

因子	パターン行列			項目
	1	2	3	
13	0.769	0.020	0.023	クラスのルールを破らないようにしている
1	0.750	-0.110	0.076	クラスのルールを守るために我慢することができる
23	0.617	-0.040	0.083	自分のしたい行動を我慢してクラスの人に合わせることができる
17	0.437	0.219	-0.040	クラスの人が掃除をしないのは許せない
4	0.435	0.076	-0.064	クラスのためにならないことはしない
22	0.415	0.152	-0.024	授業開始時には席についている
12	0.413	0.161	-0.002	クラスの人とした約束は守る
25	-0.026	0.770	0.013	クラスの人がいじめられていたら助ける
5	-0.006	0.714	0.013	クラスの人が喧嘩をしていたらすぐに止める
20	0.101	0.712	0.020	クラスに困っている人がいたらすぐに助ける
14	0.257	0.460	0.031	クラスの人がルールを破ったら注意する
7	-0.043	-0.008	0.683	クラスのみなどと一緒に行動することが多い
16	0.076	-0.064	0.584	クラスの人が係活動をよく手伝ってくれていると思う
8	-0.165	0.211	0.578	クラスが楽しい雰囲気になるように行動している
24	0.085	0.185	0.471	クラス全員で活動することが好きだ
15	0.165	0.016	0.454	クラスの人が話してくれたことに感動したことがある
10	0.256	-0.089	0.415	クラスのルールを皆がよく守っている
2				クラスのルールを新しく作らなければと考えることがある
3				クラスの人に自分の過去を話したことがある
6				クラスの人がつらい表情をしているとすぐに気づく
9				遅刻しないようにしている
11				クラスの人に家族のことを話したことがある
18				クラスのルールは自然にできたと思っている
19				クラスのだれとでもペアになることができる
21				クラスの中にあるゴミを拾うようにしている

因子抽出法: 重み付け最小2乗

回転法: Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

a. 8回の反復で回転が収束しました。

結果

因子分析(回転法: Kaiserの正規化に伴うプロマックス法で8回の反復で回転が収束した。)によりTable2に示すように、3因子を抽出した。

第1因子 7項目(因子負荷量0.769~0.413)

第2因子 4項目(因子負荷量0.770~0.460)

第3因子 6項目(因子負荷量0.683~0.415)

8項目は0.305~-0.237であったため、削除した。因子間の相関は因子1に対して因子2 $r=.674$ 、因子3 $r=.694$ 、因子2に対して因子3 $r=.665$ という正のかなり高い関数を示した。

第1因子は「ルールを守るために我慢することができる」に象徴される規範に関するものが中心となるため、規範尺度と命名した。

第2因子は「クラスの人がいじめられていたら助ける」に象徴される共助に関するものが中心となるため、共助因子と命名した。

第3因子は、「クラスが楽しい雰囲気になるように行動している」に象徴される支援に関するものが中心となるため、支援尺度と命名した。

考察

本研究は、児童用所属感尺度の構成の予備調査に当たるものである。信頼性係数は再テスト法の意味合いを持

つ本調査で算出する予定である。しかし、因子分析において、因子負荷量 0.40 以上を持ち、同時に他の因子に 0.35 以上の負荷を持たないことを基準に項目の選定を行ったので、GP 分析や I-T 相関分析と同様に、1 次元に乗らない項目を選別することができた。本調査で行う予定の信頼性係数 (α 係数) は高くなると考える。

学級は、蘭 (2006) ⁶⁾ のいう集団の統合と個別化を図ろうとする集団である。また、学級は重野がいう準拠集団でもある。ケリーやハイマンによれば、規範機能や比較機能を有するのが、準拠集団であり、学級もこの機能を有することになる。また、和田 (2003) ⁷⁾ は、対人関係距離 (プロセミックス) について、相互作用中に人と人之間に取る物理的距離のことであるととした。これらの知見によれば、所属感、統合と準拠と比較機能の作用する集団の中で感じられるものであり、物理的な対人関係距離の遠近の中で感じ取られるものである。

因子分析の結果得られた第 1 因子は、「クラスのルールを破らないようにしている」に象徴される、集団の規範に関わる項目となっている。そこで、この因子を規範因子と命名した。この因子は、ケリーやハイマンの規範機能に相当するといえる。

第 2 因子は、「クラスに困っている人がいたらすぐに助ける」に象徴される、集団内の共助に関わる項目となっている。そこで、この因子を共助因子と命名した。この因子は、和田がいう対人関係距離を近づけてなされるものである。

第 3 因子は、「クラスの人が係活動をよく手伝ってくれていると思う」に象徴される、集団内の支援に関わる項目となっている。そこで、この尺度を支援因子と命名した。この因子は、ケリーやハイマンの比較機能に相当するといえる。

予備調査としての本研究を踏まえ、本調査の児童用所属感尺度の構成 (2) の中で、尺度の信頼性、妥当性の検証をおこなう。

結 論

小学校高学年の学級集団の状況を測定できる所属感尺度を開発するための予備調査を行った。25 項目からなる所属感尺度を 626 名に実施し、3 因子構造、17 項目からなる所属感尺度を抽出した。3 因子をそれぞれ規範尺度、共助尺度、支援尺度と命名した。尺度の信頼性、妥当性は、本調査によって検証される。

文 献

1) 文部科学省：学校基本調査、中央教育審議会中間発

表 (2007)。

- 2) 吉津紀久子・乾原正：「青年期の自己概念発達に関する研究：自己概念尺度及び所属感尺度作成の試み」、第37回日本教育心理学会総会発表論文集、p468 (1995)。
- 3) Hyman, H.H. : The psychology of status. Archives of psychology, 269, 1-94 (1942)。
- 4) Kelley, H.H. : Two functions of reference groups. In G.E. Swanson, T.M. Nevcomb. & E.L. Hartley, Readings in Social psychology. 2nd. Henry Holt (1951)。
- 5) 重野純：「心理学」、新曜社 (2006)。
- 6) 蘭千壽・古城和敬：「教師と教育集団の心理」、p4-5, 誠信書房 (2006)。
- 7) 和田実：「親密な対人関係の科学」、誠信書房 (2003)。

付 録

調査用紙

所属感尺度 4 件法

- 1 そう思う 2 どちらかといえばそう思う
3 どちらかといえば違うと思う 4 違うと思う

質問項目

1. 私はクラスのルールを守るためにがまんすることができます。
2. 私はクラスのルールを新しく作らなければと考えることがしばしばあります。
3. 私はクラスの人に自分の過去 (今までのこと) を話したことがあります。
4. 私はクラスのためにならないことはしません。
5. 私はクラスの人がけんかをしていたらすぐにとめます。
6. 私はクラスの人がつらい表情をしているとすぐに気づきます。
7. 私はクラスのみみんなと一緒に行動することが多いです。
8. 私はクラスが楽しい雰囲気になるように行動しています。
9. 私は遅刻しないようにしています。
10. 私はクラスのルールを皆がよく守っていると思います。
11. 私はクラスの人に家族のことを話したことがあります。
12. 私はクラスの人とした約束は守ります。
13. 私はクラスのルールをやぶらないようにしています。

14. 私はクラスの人がルールを破ったら注意します。
15. 私はクラスの人が話してくれたことに感動したことがあります。
16. 私はクラスの人が係り活動をよく手伝ってくれていると思います。
17. 私はクラスの人が掃除をしないのは許せません。
18. 私はクラスのルールは自然にできたと思っています。
19. 私はクラスの誰とでもペアになることができます。
20. 私はクラスに困っている人がいたらすぐ助けます。
21. 私はクラスの中にあるゴミをひろうようにしています。
22. 私は授業開始時には席についています。
23. 私は自分のしたい行動をがまんしてクラスの人にあわせて行動することができます。
24. 私はクラス全員で活動することが好きです。
25. 私はクラスの人がいじめられていたら助けます。